

ジョー・アンド・チャーリーの ビッグブック・スタディ

1988 年 8 月ネバダ州ラフリン

目 次

再版にあたって	5
前書き	25
初版に寄せて	29
医師の意見	33
第一章「ビルの物語」	61
第二章「解決はある」	85
第三章「さらにアルコールリズムについて」	109
第四章「私たち不可知論者は」	125
第五章「どうやればうまくいくのか」	143
ステップ 4	167
恨みの棚卸し	175
恐れ of 棚卸し	205
性の棚卸し	219
ステップ 5	233
ステップ 6・7	241
ステップ 8・9	249
ステップ 10	265
ステップ 11	271
ステップ 12	279
訳者あとがき	286
配布資料	287

Transcripts of Journey to Recovery with Joe M. and Charlie P.

The Big Book Comes Alive

Recorded in Laughlin, Nevada, August 1988

Disclaimer:

- **Copyright notice:** Alcoholics Anonymous, Copyright © 1939 (expired), 1955 (expired), 1976 by Alcoholics Anonymous World Services, Inc. All rights reserved.
- On August 22, 2004 Charlie P. (in a telephone conversation) gave his complete permission for these transcripts to be posted on the Internet, for the use of all members of Alcoholics Anonymous.
- These transcripts are not meant to be a replacement for the Big Book, but are an aid in the study of the program of recovery, found in the Big Book of Alcoholics Anonymous.
- Direct quotes from the Big Book are found in *Italics* and are set off by quotation marks. It is the transcriber's good faith belief that their use is consistent with the fair use clause of the copyright law.
- Any text that has been highlighted, underlined, formatted, boxed or referenced was done so at the discretion of the transcribers for their own clarification or enhancement, and has been posted here as is. Text found in parentheses may or may not be Joe or Charlie's own words.
- Though every effort was made for a direct translation of the tapes, some words may have been transcribed incorrectly or left out.

Trademark notice: Alcoholics Anonymous®, The Big Book®, and A.A.® are registered trademarks of A.A. World Services, Inc.

書写 ジョー・Mとチャーリー・Pと歩む回復への道

ビッグブックのメッセージがよみがえる

ネバダ州ラフリンにて 1988 年 8 月に録音

免責事項:

- **著作権に関して:** 文中に引用がある『アルコホーリクス・アノニマス』の日本語版は、アルコホーリクス・アノニマス・ワールド・サービス (A.A.W.S.) 社が版權を所有している (©1979, 2000)。
- 2004 年 8 月 22 日 (電話での会話にて) チャーリー・P は、すべての AA メンバーに活用してもらえるように、この書写をインターネット上に投稿することについて完全な許可を与えた。
- この書写はビッグブックを置き換えることを意図していない。アルコホーリクス・アノニマスのビッグブックに書かれた回復のプログラムを学ぶ手助けをするためのものである。
- ビッグブックからの直接の引用は網掛けにしてある。書写者は、この引用が著作権法の引用条項に適用のものと確信している。
- すべての強調、下線、整形、囲み、参照は書写者自身の理解を明確かつ強調するために加えられたものであり、そのまま掲載している。カッコ内の文章はジョーあるいはチャーリーの言葉かもしれないし、そうでないかもしれない。
- テープをそのままに書写するように努めたが、不明瞭な部分や省略した部分もある。

登録商標に関して: Alcoholics Anonymous®, The Big Book®, および A.A.® は AA ワールドサービス社の登録商標です。

日本語訳について: これはインターネット上に公開されていた「ジョー・アンド・チャーリーのビッグブック・スタディ」の書写 (テープ起こし) を訳者自身が理解するために訳したものである。

再版にあたって

p.xix (19)

J&C： 私たちはこの週末を使ってビッグブック『アルコールリクス・アノニマス』を学ぶために、ここに集まっています。そのためには、まず過去にさかのぼってこの本ができた背景を知ることが、この本の内容を理解するのにとても役に立ちます。歴史の始めは「再版にあたって」のローマ数字のページ xix (19) の最後の段落からです。皆さんお手元のビッグブックをご覧ください。ローマ数字のページ xix (19) の最後の段落です。ジョー。

私は今まで何年もビルの著作を学ぶことで助けを得てきました。彼の著作はすべて私たちが学ぶために書かれたものですから、彼が何をしたかをたどれば、彼の書いたものを学ぶ助けになります。例えば、彼は常に「何が問題なのか」を語り、次に「その問題の解決は何か」、さらには「その解決を実現するための実際的な行動のプログラム」を説明しています。彼はどの文章でもたいていこの書き方をしていますから、これがビルの文章を理解する鍵になります。さて、ローマ数字のページ xix (19) の最後の段落です。

ビッグブック p.xix (19), 1 行 「AAグループ誕生への発火点となったのは、一九三五年六月、オハイオ州アクロンで、ニューヨークの株式ブローカーとアクロンの医師の間に交わされた会話だった。」

J&C： 私たちはこの株式ブローカーの名前がビル・ウィルソンだと知っています。ビルのことを株式ブローカーと呼ぶのはちょっと上品すぎると私は思います。実際の彼はそうではなく、ニューヨークで株の相場師をしていました。彼は頭の回転の遅い人たちを早口で言いくるめることで収入を得ていました。これはビルを貶めようというのではありません。彼は偉大な人物です。しかし、彼が私たち皆と同じ本物のアルコールリクスであることをはっきり理解することが、この本を理解する助けになります。なにしろ彼がこの本の主な著者なのですから。アクロンの医師はドクター・ボブ・スミスです。

ビッグブック p.xx (20), 2 行 「その六ヵ月前、このブローカーは当時オックスフォード・グループにいた一人のアルコールリクスの友人と出会った。そのあと彼は突然訪れた霊的な体験によって飲酒への強迫観念から救われたのだった。」

少し後で「ビルの物語」に進みますが、そこには 1934 年の 12 月にビルがタウンズ病院で「決定的な霊的体験」と彼が呼ぶ体験をした話があります。彼がその霊的体験をする前に、彼の人生に何が起きていたでしょう。その一つは、1934 年の 11 月後半に彼はアルコールリクスの友人エビー・サッチャーと会っています。エビー・サッチャーはビルの家のキッチンに座り、ビルに二つの重要な情報を与えました。彼はビルにこう言いました。

僕や君のようにアルコールに対してまったく無力になった人が

その状態から回復したいと望むなら、人間の力を越えた力の助けを得るしかない。

いままで医師や、牧師や、精神科医が私たちのようなアルコールクを助けようとしたが、そうした人間の力では助けることができないようだ。だから私たちは人間の力を越えた力の助けを得る必要がある、とエビーは言っています。さらに彼は、オックスフォード・グループという集まりに通っていて、その人たちは「もし霊的体験をすることができれば、その霊的体験の中で力を見つけることができる。それによってアルコールリズムから回復できる」と彼に伝えたのです。同時に具体的な行動のプログラム(後の 12 ステップ) も与えてくれました。

彼らはその行動のプログラム従えば、こうなると保証した：

- (1) 霊的体験をすれば
- (2) 力を見つけられ
- (3) アルコールリズムから回復できる

そしてエビーはこう言いました。「ビル、僕を見てくれ。僕はもう 2 ヶ月飲んでいない」 ビルはエビーがどんな酒飲みか知っていました。実際のところビルは「僕がもしエビー・サッチャーと同じぐらいひどい酒飲みになったら、その時は酒をやめる」と言っていました。そのエビーがビルの前に座っていて、ビルは寝ている間以外はずっと飲んだくれていたのに、エビーは 2 ヶ月もしらふでいたのです。エビーがビルに、解決つまり決定的な霊的体験*と、その霊的体験を得るための具体的な行動のプログラムを語ったとき、エビーの姿がビルに強い印象を残しました。しかし、ビルが知る必要があったのは、それだけではありません。さらに先に進みます。

* 「自分の人生に対する態度が根本から変えられていること」 付録Ⅱ 霊的体験 p267 参照。

ビッグブック p.xx (20), 7 行 「ブローカーはまた、ニューヨークにいたアルコールリズムの専門家で、AA メンバーにとっての聖人である故ウィリアム・D・シルクワース医学博士に大いに助けられた。博士による、初期のころの AA の話が次の章に掲載されている。シルクワース博士から、ブローカーはアルコールリズムの深刻な現実を学んだ。」

J&C：ビルの話に戻ります。1933年の夏までさかのぼります。ビルはアルコールの離脱症状のおかげで、シルクワーク博士によってタウンズ病院に入院しました。入院後数日経って頭がスッキリしてきた頃に、シルクワーク博士はビルにアルコールリズムに関する博士の意見を説明し始めました。博士はこう言いました。

私はアルコールリズムは意志の力の問題や、性格上の問題ではないと信じる。

またそれは何かの罪でもない。

君たちは病気に苦しんでいるのだ。私にはそれが独特の病気に見える。それは二重の病気、精神が病んでおり、また肉体も同様に病んでいるのだ。

さらに博士はこう続けました。

問題

君の身体はアルコールに対するアレルギー体質になってしまった。

どんな形であれアルコールが君の体の中に入れば、

それが身体的な渴望を引き起こし、そのせいでいったん飲み始めたらやめることができなくなる。

その身体的な渴望を引き起こすアレルギーのせいで、

君はもう二度と安全にアルコールを飲めない。

さらに君の精神の強迫観念も進行している。

精神の強迫観念とは反対の考えをすべて打ち負かす考えだ。

君がどんなに真剣に酒を飲まないでおこうと思っていっても、それは何の違ひももたらさない。ある時、君の飲酒に対する精神的の強迫観念が強くなり、飲まないでおこうという考えを脇に押しのける。君の心は一杯飲んでもかまわないだろうという考えに傾いていく。そして、最初の一杯を飲むと、やめることのできないアレルギーの引き金を引いてしまうのだ。

君の身体のせいで、君は安全に飲むことができない。

君の精神のせいで、君は飲まないでいることもできない。

だから君はアルコールに対してまったく無力なのだ。

このことをビルは1933年の夏に知りました。**しかし問題を知るだけではそれを解決できません。**だから、そのすぐ後に彼の心は一杯飲んでも大丈夫だと考え、そして彼は最初の一杯を飲み、アレルギーの引き金をひいて、さらに一年飲んだくれました。

翌1934年の夏にビルは再びアルコールの離脱症状のせいでシルクワース博士によってタウンズ病院に入院しました。シルクワース博士は今度はもうビルは治療不能だと宣告し、振戦譫妄（しんせんせんもう）の間に亡くなるか、コルサコフ症で完全な狂気になって精神病院に引き渡すか、あるいは生かしておくためにはボディガードを雇うしかなくなるだろうと、ビルの妻ロイスに伝えました。彼はこの言葉を立ち聞

きし、その恐怖でしばらく酒をやめたと述べています。しかし 1934 年の休戦記念日（訳注：11 月 11 日）に彼の心は一杯飲んでも大丈夫だと考えます。そして一杯飲み、やめることのできないアレルギーの引き金を引いてしまいます。この「後」になって、エビーがやってきて彼にこの問題の解決と行動のプログラムを与えてビルが回復できるようになったのです。ビルはこの 3 つのことを知りました。

- (1) **ビルは問題を知った** シルクワース博士から (p10, 11 行)
- (2) **ビルは解決を知った** (p.18, 14 行、p.41, 2 行)
- (3) **行動のプログラムを知った** (オックスフォード・グループの) エビーから (p.xx (20), 11 行)

これによりビルは霊的な体験をして回復することが可能になった。

心と体の健康を取り戻す

そしてエビーはこの後にビルをオックスフォード・グループのミーティングに連れて行きました。その後のことをこう述べています。

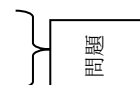
ビッグブック p.xx (20), 7 行 「彼はオックスフォード・グループの教義を丸ごと受け入れることはできなかったが、自分の過去を道徳的に棚卸しすること、短所を認めて告白すること、傷つけた人たちへ埋め合わせをすること、他の人の手助けをすること、神への信仰と依存が必要であることなどを納得した。」

J&C これはオックスフォード・グループの教義です。これが後に AA の 12 ステップに発展します。

ビッグブック p.xx (20), 11 行 「アクロンに行く前、ブローカーは、他のアルコールクを助けられるのはアルコールクだけであるという考えを持って、大勢のアルコールクたちと懸命にかかわったのだが、できたのは自分自身がどうにか飲まずに過ごせたということだけだった。」

J&C : ビルは最後の退院の後に他の人たちを助けようとしてしました。ドヤ街に出かけて行って人をオックスフォード・グループのミーティングに連れて行こうとしてしました。バーの止まり木から人を引きずり降ろし、オックスフォード・グループのミーティングに引っ張って行こうとしてしました。誰も行こうとしませんが、彼はとにかく連れて行こうとしてしました。彼は世界中を素面にしようと熱狂的に取りかかったのですが、数ヶ月経っても素面でいたのはビルだけでした。ビルはロイスに、僕はみんなを素面にして助けようとしているのに、誰も素面になりたがらないんだ、とこぼしました。ロイスはビルに、シルクワース博士に相談してみることを勧めました。そこでビルはシルクワース博士に会い、ロイスにしたのと同じ話をしました。博士は、ビルが街でやっていたことを聞き及んでいました。そして、「君も分かっているとおり君自身は素面でいられている。つまり他の人を助けることは君自身をしらふでいさせてくれるんだ」と言いました。酔っぱらいは君の偉大な霊的体験の話を受け付けられないから、その話をするのはやめて、私が君にした話を彼らにするといい。つまり、

- (1) 彼らにアルコールリズムの病気について話す。
- (2) 彼らに身体のアレルギーと精神の強迫観念（二重の病気）について話す。



そのせいで君がどうなったか経験を話すと良い、そして彼らがそれを理解したら、ようやく

- (3) 霊的な事柄について話す

ことができる。

問題

私の診たアルコールリクは皆が二つの疑問を持っていた。

1. どうして昔のように飲むことができなくなってしまったのか（訳注：トラブルなしに飲むことができない）
2. どうしてやめたいと思っているのにやめられないのか

(1) 彼らに病気の本質について話す

(2) 彼らに身体のアレルギーと精神の強迫観念（二重の病気）について話す。

そうすれば君は彼らの関心をひきつけることができる

(3) 彼らの関心をひきつけることができたなら、霊的な事柄について話す

彼らにまず何が問題なのかを話す。 ビッグブックには

ビッグブック p.xx (20), 13 行 「ブローカーは商用でアクロンに向かったが、商取引は見事に失敗に終わり、もしかするとまた飲んでしまうのではという恐れを抱くことになる。その時彼は、いま自分を救うためにこそ自分のメッセージを他のアルコールリクに伝えなくてはならないと悟った。その相手のアルコールリクがアクロンの医者だったのだ。」

J&C： ビルがアクロンに行った話は皆さんご存じでしょう。ビルは何人かの男たちと一緒に仕事をしていました。彼らは（株主からの）委任状争奪戦をやってアクロンのある会社の支配権を奪おうとしていました。しかし滞在中に事態は暗礁に乗り上げ、仕事仲間たちはビルをアクロンに置き去りにして帰ってしまいました。メイフラワーホテルのロビーに立って、悲しく落ち込んでいたビルは財布の中身を数えてみたものの、ホテルの支払いを済ます金すらありません。ふとロビーの端のドアを見ると、その向こうにバーがありました。たぶん、バーは薄暗くなっていて、音楽が流され、客のしゃべる声はうるさく、タバコの煙が立ちこめていたことでしょう。そしてビルの心はこうささやきました。「きっとバーへ行ったら気の合う人と話をすれば気分も良くなるかもしれない」そしてそのドアをくぐると、彼の心は酒を一杯飲むことを考え始めました。

訳注：このくだりは第十一章 p.223~p.227 に描写されている。

ビルは、このままバーに入ってしまうと、いずれ酔っぱらいに戻ってしまうことにハッとしました。そして彼はニューヨークでどうだったか思い出しました。他のアルコールリクを助けようとしているとき、例え相手が助からなくても、彼自身は気分が良くなってきたのでした。だからビルは自分に言い聞かせました。僕がすることはアクロンで酔っぱらいを見つけてそいつに話をする事だ。そして彼は何本か電話をかけて、ヘンリエッタ・サイバーリングという女性と連絡がつけました。ヘンリエッタはこう返事してくれました。「私はあなたが話しにしたい相手を知ってますよ。これからその人に電話をして、あなたが面会できるよう取り計らいましょう」そして彼女はドクター・ボブの家に電話をかけ、ボブの妻のアン・スミスと話しました。「ニューヨークから来た男の人がいるんだけど、その人はボブ先生がアルコールリズムから回復するのにうまくいきそうなやり方を知っているというの。ボブ先生をうちに連れて来られるかしら」。するとアンは、「私もぜひそうしたいわ。でもご存じの通り今日は母の日の前日でしょ

う。だから彼は鉢植えをお土産に買ってきたのはいいんだけど、それをテーブルの上に据えて、彼はテーブルの下でそのまま寝ちゃったの」。アンは翌朝まで待って連れて行けるかどうか返事をする伝えました。もちろん翌朝ドクター・ボブが目覚めたとき、アンはボブにヘンリエッタの家に行ってニューヨークから来た男と話をするように頼みました。けれどその朝のドクター・ボブの気分は最悪でした。二日酔いで気持ち悪かったので、ドクター・ボブは「私は行かない」と言いました。だからアンは、しつこく、しつこく、しつこく、何度もボブを説得し、ようやくボブも、会ってもいいけれど 15 分だけ、終わったらすぐに家に戻ってくると言ったんです。それでアンが彼を連れて行って、ビルとボブは二人だけで文字通り何時間も話をしました。その部屋から出てきたとき、ボブはビルのことを「彼はアルコール中毒が何なのか知っている私が会った初めての人間だ」と言いました。ここで彼に何が起きたか見てみましょう。

ビッグブック p. xxi (21), 1 行 「この医者、飲酒問題の窮地から逃れるために、何度も霊的な手段を試しては失敗していた。」

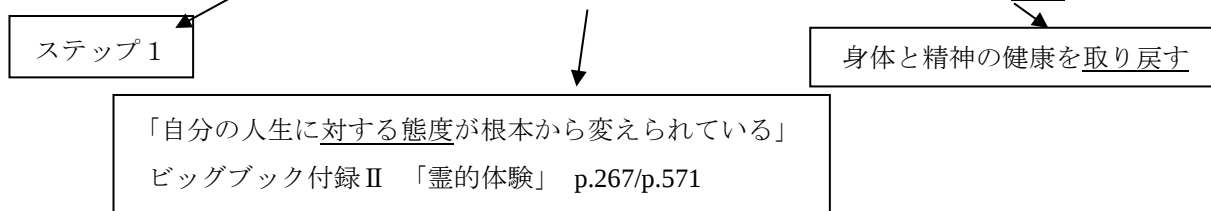
J&C: ビルはドクター・ボブがすでにオックスフォード・グループにいたことを知って驚きました。ボブは解決について、つまり霊的な経験と行動のプログラムについてはビルより詳しく知っていましたが、それを回復に必要なだけ深く実践することはできずにいました。なぜなら彼は自分の何が悪いのか知らなかったからです。彼はそれを意思の力の問題だと思いました。あるいは道徳の欠陥だと。あるいは罪だと。その時まで皆が彼にそう言っていたのですから、彼もそう考えるしかなかったのです。だからビルの運んだメッセージの中で一番ドクター・ボブの興味を引いたのは、解決でも、行動のプログラムでもなく、問題、つまりアルコール中毒の本質です。

ビッグブック p. xxi (21), 2 行 「だが、ブローカーからシルクワース博士の説明——アルコール中毒の絶望的な将来についての話を聞いた医者は、前には決して奮い起こせなかった意欲をもって、自分の問題についての霊的な処方箋（しょほうせん）を実践し始めたのだ。彼は一九五〇年に没するまで、二度とアルコールを口にする事はなかった。」

J&C ビルはここではドクター・ボブに最初にまずアルコール中毒のアレルギーについて話しました。彼がバーに出かけて行って 1 杯か 2 杯だけ飲もうと心に決めていても、いつも思ったより飲み過ぎてしまい、一晩中あるいは次の日まで飲み続けてしまったこと。シルクワース博士が彼に言ったことによれば、それは身体のアレルギーで一杯飲むともっとたくさん飲みたくなる渴望を引き起こすこと。するとドクター・ボブはこう答えました。「そう私も同じように飲んだんだ。君は本当に自分の言っていることが分かっているね、私も同じ飲み方だったんだよ。1 杯か 2 杯飲むだけのつもりだったのに、気がつけば 3 杯、4 杯、5 杯、10 杯、15 杯、20 杯と自分でもどうしてそうなるか分からなかったんだ。身体のアレルギーだって？ そう、そのとおりだ」 ビルは別のことも言いました。「僕が飲んでいないとき、僕はしらふでしたが、いつでも飲みたいという気持ちがあってそれが頭から離れなかった。シルクワース博士は、それは飲もうという考えに取り憑かれる精神の強迫観念だと言ったんです」するとドクター・ボブはこう答えました。「私にも同じ強迫観念がある。君は本当によく分かっているね」そうして彼ら二人はアルコール中毒という病気について意見が一致しました。ビルはさらに細かいところまで説明し、ドクター・

ボブが「それは私のことだ。君は本当に良く分かっているね」と言ったわけです。二人は自分たちが同じであることが分かったのです。

実はビルがこのやり方をしたのはこの時が初めてでした。ニューヨークにいたころの彼は（酔っぱらいに）解決について話すばかりでした。偉大な霊的体験。彼がタウンズ病院で経験した白い光。しかしこの時、ビルはドクター・ボブと向かい合って座りながら、ドクター・ボブの酒については何も話しませんでした。そのかわりビルは「私の酒の話をさせてくれ」と言いました。彼の経験を分かち合い、彼自身のアレルギーについて話をしたおかげで、ドクター・ボブはその話が自分と同じであることに気付くことができました。それにより、ボブは自分がいかにアルコールに対して無力であるか気付きました。アルコールに完全に打ち負かされた最初の時でした。そして彼はいままでできなかった深さでシンプルな行動のプログラムに取り組み始めました。そのおかげで彼は霊的な体験をし、アルコールリズムからも回復したのです。



ビッグブック p. xxi (21), 4 行 「このことは一人のアルコールリクは、そうでない人には決して真似のできない影響を他のアルコールリクに与えることを示していると思われる。」

J&C だから私たちが自分の経験を話すことで、アルコールリクではない人には決して真似のできない影響を新しい人に与えることができます。というのも新しい人はここが私たちと同じだとすぐに分かるからです。

- (1) 身体のアレルギーについて
- (2) 精神の強迫観念について
- (3) 私たちの考え方と私たちがしたこと

ビッグブック p. xxi (21), 6 行 「また一人のアルコールリクが、精力的に他のアルコールリクに働きかけることは、その人自身の回復を永続的にするために不可欠であることも教えてくれている。」

J&C この時ビルはもうすぐ飲みそうだったのです。だからビルはドクター・ボブの酒をやめさせようと彼に会いに行ったのではなく、ビル・ウィルソン自身が酒をやめ続けるためにドクター・ボブに会いに行ったのでした。その晩に、ほかのアルコールリクに関わることは私たち自身の回復に欠かせないことが証明されたのです。オックスフォード・グループの教義の一つは「失いたくなかったら人に与えなさい」です。だから彼らはすぐに、自分たちは別のアルコールリクを探して話をしなくちゃならないと決めました。そこでドクター・ボブは彼が働いていたアクロン市立病院に電話を掛けました。そして二人が会って話ができそうなアルコールリクがいないか婦長にたずねました。「ええ、ちょうどいい人が一人いますとも。看護婦の目の回りにあざを作ってくれて、私たちは彼をベッドに縛り付けたところですよ」 ドクター・ボ

再版にあたって

ブが「じゃあ彼を個室に入れておいてくれ。明日の朝面会に行くから」と言うと、看護婦はこう答えました。「わかりました。ところで先生、先生はその方法をまずご自分で試されたんですね」

そして次の朝に二人はこの男を訪ねました。彼の名はビル・ドブソン。このベッドにいる男が描かれた絵は世界中の AA に広がっているの、きっと見たことがあるでしょう。座っているビル・ドブソンに向かって話しかけているのがビルとボブです。彼らはビル・ドブソンに対してビル・ドブソンの酒の話はしませんでした。

二人は彼に二人の飲酒について話しました。

二人の酒についての話を分かち合ったおかげで、ビル・ドブソンは何が問題かすぐに理解しました。

彼は身体のアレルギーと精神のとらわれについて、それまでは何も知りませんでした。

彼はアルコールに対して完全に無力だということ、そして

回復するために自分を越えた力の助けを得るしかないという事実を受け入れられるようになりました。

二人は彼に霊的体験が必要だと話し始めました。

どうして回復するために自分たちにそれが必要だと考えるようになったか話しました。

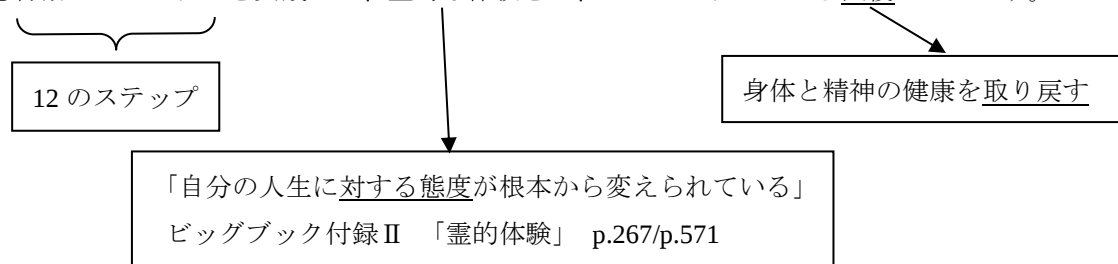
二人はどうやって簡単な行動のプログラムを実践して結果を得たか話しました。

2日後、ビル・ドブソンは「クローゼットから服を出してくれ。私は家に帰るよ」と妻に言いました。

彼は起きあがって服を着ると家に帰り、行動のプログラムを実践し始めました。

さあどうでしょう、彼も決定的な霊的体験をし、アルコールリズムから回復したのです。

さて3人になりました。1935年夏のアクロンで、3人が3人とも問題を知り、3人とも解決を知り、そして3人とも行動のプログラムを実践して、霊的な体験をし、アルコールリズムから回復したのです。



ビッグブック p. xxi (21), 10 行 「このアクロンでの取り組みは一九三五年の夏いっぱい続けられた。失敗例も多かったが、勇気づけられるような成功例もあった。」

J&C 私たちがビルとボブと最初の 100 人を賞賛していることはご存じの通りです。彼らは賞賛に値します。しかし、この 1935 年の夏のことを私たちが想像してみると、きっと彼らは自分たちが何をやっているか本当は分かっていなかったことでしょう。彼らはこの夏じゅう様々な人にこれを試してみたはずで